



神々と日本人～神社を通して日本を知る

神田神社 権宮司 清水 祥彦様

紹介者 高山 肇委員長

私は約 30 年間、神田明神にご奉仕をして参りました。本日は現在の神社の状況を説明させていただきます。

今、現代社会は様々な危機に直面しています。まず、規範の喪失、核家族化による家庭の荒廃、また、日本人としての誇りの喪失、伝統の喪失が叫ばれる時代です。多くの若者たちが自分の立ち位置が今一つはつきりしない、そのような問題もごさいます。

そのひとつとして、個人主義が蔓延しているということ。そして、オウム真理教の事件以来、宗教に対する拒絶感、忌避の気持ちが増えていること。また、貧困の問題、宗教や伝統文化への無関心などが大きな問題になっています。

今、宗教崩壊・仏教崩壊という言葉が囁かれています。例えば、インターネットの Amazon ドットコムは、法事法要の手配チケットビジネスで、ご供養の儀礼がビジネスの中に組み込まれています。そうした現代社会の実情や宗教が世俗化することにより、私たちの受け止め方や心の問題が変化しています。

仏教だけの問題だけではごさいません。私ども神社神道も危機に瀕しています。3 年前の NHK の「おはよう日本」の中で、「地域の神社が守れない！」という特集が放映されました。私は寝耳に水で大変驚きました。それは、25 年後には神社の 4 割が消滅する危機にあるという話で、現代社会の伝統宗教を取り巻く社会状況についての説明でした。

仏教崩壊も含めて、私たちの宗教への意識変化が大きいということ。それは「少子高齢化」「孤族」「孤独」「個人主義」によって人の動きが変わっているということです。その根拠は、國學院大学の石井研士教授が、平成 25 年に日本創成会議で、少子化や人口移動で将来消滅する可能性がある自治体は、全国市町村の半分の 896 自治体を選び、具体的には 20 から 39 歳の女性が 30 年間で 5 割以下に減る自治体を消滅可能都市と指定しました。そのエリアにある神社は、全神社の約 4 割にあたります。日本の集落が過疎化・高齢化によって廃絶する危機があり、神社も同様です。若いロータリオンの方は、抱えなければならない問題です。

日本の人口予測では 1 億 2 千万人が、50 年後には 8 千万人台に激減してしまいます。65 歳以上の高齢化率に関しても、現在 4 人に 1 人が 65 歳以上ですが、2065 年には 2 人に 1 人弱が 65 歳以上になります。

それと同時に日本人の宗教観を知って頂きたいと思います。あなたは宗教を信じていますか？という質問に、「信じていない」が 72%、「信じている」が 26%です。将来の子供たちが神様も仏様も信じることができない時代になってしまうのでしょうか。しかし、ご先祖様を敬う気持ちがあるが 94%、盆や正月にお墓参りに行くが 80% 近くです。半面、無宗教で葬式をしたという 20 歳台が半数います。私たちが伝統としてきた宗教を中心とする文化とは全く違う考えの方がいることも事実です。

お祭りは千代田区の住民にとって大変大きなものです。祭りに参加したことがあるかリサーチしてみました。「ある」と答えた方は 19%と 5 人に 1 人しか参加したことがありません。「ない」は 80%です。千代田区に於いては多くの方に参加して頂いていますが、このような実態でもあります。そして、参加したことのない人の理由は、「きっかけがない」「住んでいる場所の近くにお祭りが無い」「参加する方法を知ら

ない」という答えがありました。

では、祭りの意義や役割を質問すると、「伝統文化の継承」「人々の交流の場を作る」と、祭りは伝統文化の継承やコミュニケーションにとって重要だと認識されています。

ちなみに、全国のお祭りの数はどのぐらいだと思いますか？伝統的なお祭りは年間約 30 万件行われています。祭りは季節感を感じ、地域の絆を深め人との結びつきを強くします。

「祭りは何か」、それは目に見えない神の訪れを待つのが「祭り」の語源だと言う説もあります。「祭りの意義」は、非日常的な社会劇であり、そこには潜在的な神話的世界が、一定の儀礼様式のなかで再現され、喜びと安堵の実感を人々が共有するものと言われて

います。作家の村上 龍氏は、「祭りは地域の文化資源です。グローバル社会の中、見直される祭りの価値。日本には祭りがある！国や地域が疲弊している今、日本人は精神的な危機にある。そんな時こそ、祭りのように何百年も変わらず、地域社会で生き続けている伝統行事が、大きな財産となる。」と語っていました。

全国に神社は 79,000 社でコンビニの 6 万店を上回っています。しかし、神主の数は 21,000 名しかいません。実際にはほとんどの神社が無人だということです。神職が不足し、1 人で複数業務したり、副業を持ちながら神職を続ける方が圧倒的多数です。

今、東京文化資源区がクローズアップされています。そのエリア内にある神保町は「出版文化資源」、秋葉原は「ポップカルチャー資源」、本郷は「学術文化資源」、上野は「芸術文化資源」、神田は江戸の伝統を受け継ぐ「精神文化資源」。これらのエリアは再開発が遅れている地域です。眠れる東京の文化資源をどのように後世に残すことができるかが課題です。

そこで神田明神は、伝統と革新をテーマに、新しい時代の施設、神田明神文化交流館を建設中です。参拝にいらっしゃる海外の方にも日本の文化を知って頂きたいと思います。地下 1 階は日本文化体験の場、1 階はお土産屋やカフェ、2 階と 3 階は多目的ホール(最大 400 名)、4 階は貴賓室です。人々が交流できる多目的ホールは神社が生き残りをかけて考えた施設です。

最後に、吉田兼好の徒然草を紹介します。「春暮れて後、夏になり、夏果てて、秋の来(きた)るにはあらず…。生・老・病・死の移り来(きた)る事、また、これに過ぎたり。四季は、なほ、定まれる序(ついで)あり。死期(しご)は序を待たず。死は、前よりしも来(きた)らず、かねて後に迫れり。人皆死ある事を知りて、待つことしかも急ならざるに、覚えずして来る。」

私たちは、知らず知らずのうちに死が迫っていること。今、生きている者がやらなければならないこと。それを改めて教えてくれる言葉だと思います。皆様の命を充実させ今後も奉仕活動を通して社会のためにお力を尽くして頂き、少しでも神社に関心を持って頂ければと思います。